

目次

ページ

特別講演会報告	・ 大谷英人氏	1
第1回都市計画研究会報告	・ 早志敏治氏、中尾正俊氏	2
第2回都市計画研究会報告	・ 岡 将男氏、村田義明氏	3
会員コラム	・ 中村良三氏	4
会員紹介	・ 加藤文教氏、曲田清維氏	5
ホットコーナー	・ エジプトと都市(福馬編集委員)	6
平成18年度第2回幹事会報告		11
今後の活動計画		11
編集後記		12

特別講演会報告

広島市において、まちづくりにおける合意形成技術者の資格認証制度をテーマとした講演会が開催された。

日時：平成18年7月29日(土)15:00~17:00

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ研修室C

テーマ：「まちづくり」における参加・合意

- 合意形成技術者の資格認証の検討を中心に -

講演者：大谷英人氏(高知工科大学教授(社会システム工学教室・工学部・大学院工学研究科))

参加者数：25名

1 研究会の経緯

土木学会四国支部では、「土木技術者における合意形成運営技術に関する研究委員会」を設置し、四国におけるPublic Involvement事例の分析、合意形成技術・手法の整理、社会的合意形成のプロセスを運営するための技術者(合意形成運営技術者)の教育方法・資格・資格認証のあり方などについて研究を行ってきた。

2005年度からは、合意形成を担う技術者の育成に資するため、技術者が社会的合意形成のプロセスを運営するための技能について評価する方法、合意形成を担う土木技術者の資格認証や認定のあり方について検討している。

2 合意形成の必要性和合意形成運営技術者

合意形成とは、「多様な価値観の存在を認めながら、お互い納得できる解決策を見出していくプロセスのこと。異なった利害を調整して、折り合いをつけること」である。

社会資本整備における合意形成のためには、住民、行政、専門家相互において、質の高いコミュニケーションがなされ、プロセスの透明化の中でお互いに納得できる意志決定がなされる必要があり、多数、多様な関与、参加の中で、手続き、話し合い、情報提供、広報などの運営を行う専門的な職能を有する技術者(合意形成運営技術者)の存在が

重要となる。

こうした技術者のプロジェクト参加、採用、待遇などの社会的仕組みを持つことが有能な技術者の育成などにつながることから、運営技術総体としての評価が必要である。

3 合意形成運営技術者に求められる技術

技術者に求められる技術は次のように分類される。

【プロセス運営能力】

・ 準備・実施・意志決定・公表・参加継続などのプロセスにおける運営技術、中立的役割、マネジメント能力

【人的能力】

・ プレゼン能力などインパクトと影響力、コミュニケーション・発言者の意図伝達などの対人関係理解能力

【手法知識】

・ 情報公開・情報収集などにおけるメディアの活用、ワークショップ・シンポジウム・公聴会などの体験・討論

4 日本・米国・英国の資格制度調査

合意形成関連資格制度として、次の事例があげられる。

【日本】PMP(Project Management Professional)、PCM手法研修モデレーター認定、自然体験活動指導者、再開発プランナー、まちづくり選考建築士、GIS技術教育主催者認定

【米国】認定都市計画家、環境紛争処理・コンセンサスビルディング専門家名簿、中立者パネル、メディエーター認定、市民参加の能力の認定、紛争分析・解決学位(ジョージ・メーソン大学)

【英国】公認プランナー、公認調査士、英国仲裁人協会、メディエーター、紛争解決に係わる学位(ロンドン大学、シンガポール国立大学)

資格制度の評価方法の特徴として、日本の筆記試験重視に比べ米国・英国は教育訓練が重視されていること、米国では各団体による認定・認証に対する社会的認識が高く、専門家名簿が作成、利用されていること、英国では大学入学時から専門家による指導、ログ・ブック、PDPによる訓練プログラムが実施されていることなどがあげられる。



大谷先生の講演の様子

5 意見交換

講演の後、意見交換が行われた。以下、いくつかの意見を紹介する。

(合意形成について)

- ・何を合意するのか明確化することが重要。合意内容を検証する仕組みも必要。
- ・市民参加、合意形成の前提となる分析、計画作業の内容、情報公開などが重要になる。
- ・合意形成の評価が難しい。参加者が反論しないことが合意形成ではないし、ワークショップ開催回数でもない。

(技術者の必要性、素養、資格について)

- ・構想、計画の決定のほか、今後は、実施段階における合意形成が重要になる。
- ・再開発事業などの合意形成では、法手続きが用意されているが、合意形成技術者は信頼を得ることが特に重要。
- ・合意形成のスキルは、技術、知識のほか、経験が重要である。
- ・ファシリテーターは、独立した資格とはせず、技術者+となる資格としたほうがよい。
- ・合意形成技術については、裁判など難しい問題もある。
- ・合意形成技術者をリストに掲載する方法は、行政側にとっては選択しやすく、住民への提示も可能になる。
- ・コンサルタントは、発注者である行政よりの対応になりがちな面もあるが、中立で対応すべき。

<付記>

合意形成技術、資格認証制度という今日的テーマについて、詳しい講演と活発な意見交換が行われ、有意義な講演会となった。今後の動向を注目したい。



会場の様子

(文責 藤岡憲三)

第1回都市計画研究会報告(LRTを活かしたまちづくり)

日本都市計画学会中国四国支部の平成18年度都市計画研究会のテーマは、「LRTを活かしたまちづくり」です。

第1回研究会では、LRTの活用が進んでいる広島市の事例が取り上げられました。研究会への参加者は行政関係者、広島電鉄株、広島LRT研究会、大学の先生、大学生、コンサルタントと多彩に52名の多くの方々の参加をみました。

日時：平成18年7月1日(土)14:00~17:00

場所：広島大学千田キャンパス205号

テーマ1：『広島市のLRT施策について』

報告者：広島市道路交通局都市交通部

早志敏治 交通対策担当課長

テーマ2：『路面電車からLRT交通システムへ』

報告者：広島電鉄株式会社

中尾正俊 常務取締役

電車カンパニープレジデント

(進行：広島大学大学院工学研究科 杉恵頼寧 教授)

テーマ1 『広島市のLRT施策について』

テーマ1では、「広島市の交通課題」、「広島市の交通施策」、「広島市のLRT施策」の3本柱で報告がされました。

(1)広島市の交通課題

交通分野における環境負荷の低減
 高齢社会や地域に対応した交通環境づくり
 日常的なマイカー依存の是正
 円滑な経済活動を確保する交通基盤の整備
 都市の魅力づくりへの貢献
 更なる投資の重点化とストックの有効活用

(2)広島市の交通政策(新たな交通ビジョンの策定)

これまでの交通施策を再構築するものとして2004年6月に策定。平成19年度までの具体的な整備目標を明記。

『ひと・環境にやさしく、活力ある広島交通体系づくりをめざして』

- ・自動車に過度に依存する交通体系を見直し、交通体系の軸足を公共交通へシフト
- ・人が中心の。環境にやさしい都市づくりをめざす
- ・都市の魅力を高める交通体系づくりをめざす

(3)広島市のLRT施策

現在の路面電車は運行時間の30%が信号待ち時間、12%が乗降時間となっており表示速度は約10km/h程度と低いが、市中心部、公共施設へのアクセス利便性は高い評価を得ており、今後は次に示す内容のLRT総合整備事業を国の支援を受けて展開して行くことが必要。

LRTシステム整備費補助...低床路面電車車両(LRT)、停留施設、制振軌道、ICカード
 都市再生交通拠点整備事業...架線柱、停留場
 路面電車走行空間改築事業...走行路面、停留場
 低床路面電車車両(LRT)の15編成導入補助、広島港・紙屋町西電停改良、平良駅(廿日市市役所前)同一ホームでのバスと路面電車の乗降施設整備
 平和大通り東・西ルート、駅前大橋ルート、段原・宇品東ルートの可能性検討

テーマ2『路面電車からLRT交通システムへ』

テーマ2では広島電鉄株の路面電車を発展・高度化する「LRT交通システム」への取り組みが紹介されました。

(1)会社・路線の状況等

1912年(大正元年)開業、今年で94年目
広島市内軌道8系統19.0km、西広島～宮島の鉄道1系統16.1kmの合計35.1km
平成16年度1日平均で154千人の利用(軌道106千人、鉄道48千人)

(2)具体的な取り組みの紹介

路面電車存続のための施策

- ・軌道敷内諸車乗り入れ禁止及び区画線設置
- ・電車優先信号の設置(市内軌道5箇所)
- ・各電停での電車接近表示、案内放送設置
- ・シームレスネットワーク(軌道と鉄道の直通運転)

JR横川駅前広場への路面電車直接乗り入れ

広電西広島駅の鉄道と軌道の乗り場統合、駅舎改良
広島港での軌道延伸、路面の芝生舗装。

車両の近代化と超低床車両(LRT)の導入

- ・全国の車両保有(動く交通博物館)
- ・超低床車両グリーンムーバー(ドイツ製)
- ・超低床車両グリーンムーバーマックス(国産化)

利便性を高める構想・計画

- ・平和大通り線計画、駅前大橋線計画
- ・トランジットモール(相生通り、宇品地区)

ユニバーサルデザインへの取り組み

- ・超低床車両でのベビーカーのスムーズな乗降
- ・電車・バス同一ホーム(廿日市市役所駅前)

まちづくりとLRT

- ・今後のまちづくりはコンパクトシティ
- ・LRTを都市環境負荷の低減装置として導入促進

活発な質疑・建設的な意見

テーマ1・2の報告を受け、以下に示すような活発な質疑や建設的な意見交換が活発に行なわれました。

表定速度の向上には、優先信号の更なる充実が必要であり、少なくとも電停間ノンストップで！

今後はICカードの導入やチケットレス、信用乗車制度等による乗降時間の短縮が必要。

現在の超低床車両(LRT)は連結車両だが単車型の超低床車両(LRT)の導入も必要。

優先信号に関しては路面電車とバスに共通なシステムや、海外では既に実施されている電停をバス停としても利用する検討も必要。

自動車交通削減との関係でいえば、都心商業施設での駐車料金サービス等に関する検討が必要。

(文責 安永洋一郎)



報告をされる早志課長



広電中尾常務を囲み真剣な議論が展開

第2回都市計画研究会報告(LRTとまちづくり)

日時:平成18年9月9日(土)14:00~16:30

場所:コンフォートホテル広島 会議室

LRTとまちづくりをテーマとして、路面電車と都市の未来を考える会から岡会長と、国土交通省から中国運輸局村田鉄道部長を招いて開催された(参加者39名)。

テーマ1「LRTを巡る諸制度と市民運動」

岡将男(路面電車と都市の未来を考える会(RACDA)会長)

岡山市内で家業を営みながら、仕事で全国各地を訪れる機会が多かったが、どこの都市でも中心市街地を面白くするためには「まちづくり」が必要と感じた。これがきっかけとなって、岡山市でLRTを活用したまちづくりをはじめた。



LRTとは交通システムの総称であり、私はLRTを「路面電車+都市近郊鉄道+TDM」と定義しており、「良いところ取り交通政策」とも言えよう。LRTは、都市再生、バリアフリー、高齢化社会などの課題に対応し、更には地球温暖化の面からも注目されて、環境省もLRTに関する研究を始めている。LRTは21世紀の重要な交通手段であり、岡山はその先進地として、いま注目を浴びている。

全国にはLRTに関する60の市民活動などがある。インターネットを通じて各地の情報を収集し、これをまとめて「LRTとまちづくり」という書籍を出版した。情報化の進展により、LRTのネットワークが飛躍的に拡大した。

地球環境と交通問題は大きな社会問題となっている。自動車は世界で2000年に7億台、2030年13億台、2050年には20億台まで増加すると言われている。交通機関別CO2排出量は、自動車:バス:LRT/鉄道=9:3:1とLRTは地球に優しい交通手段である。また道路1車線あたり輸送力は、自動車1,200人/時(1,000台/時)、バス300人/時(60台/時)に対して、LRTは18,000人/時(60編成)と大きい。しかし国の予算は道路建設の10兆4565億円に対して鉄道予算は約1500億円と桁違いに小さい。

平成7年にRACDAを結成し、軌道敷を活用したトロックコースなどを通じてまちづくりに取り組んでいる。東京大学とは路面電車の延伸の仮想社会実験シミュレーションを一緒に手掛けており、高知工科大学や慶応大学なども路面電車に関する研究の相談を受けている。JR吉備線のLRT化の路線計画なども検討している。岡山市でも中心市街地の衰退に伴いLRTの利用者は減少しているが、岡山駅のLRT乗降客の7割がJR利用者であり、来訪者を都心に運ぶ交通機関として重要な役割を果たしている。

人生を80年として考えると、そのうちの約30年間はクルマを使えない年齢であり、LRTなど公共交通機関の重要性が高いことは論を待たない。「まちづくりのキーポイントは？」という参加者からの質問には、「LRT導入がまちづくりに与える効果は大きい

人生を80年として考えると、そのうちの約30年間はクルマを使えない年齢であり、LRTなど公共交通機関の重要性が高いことは論を待たない。

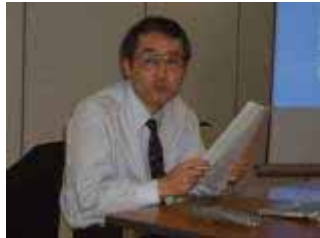
「まちづくりのキーポイントは？」という参加者からの質問には、「LRT導入がまちづくりに与える効果は大きい

が、採算のためにもさらに利用者を増やしていくことが重要である。そのためにも市民との合意形成が重要である。」と訴えた。また「MOMO など電車を使った遊びを積極的に進めており、中心市街地の衰退にも歯止めがかかった。今後とも LRT をツールとしたまちづくりに取り組んでいく。」と歯切れの良い回答で講演の幕を閉じた。

テーマ2「LRTに関する国道交通省、中国運輸局の取組み」

村田義明(国土交通省中国運輸局鉄道部長)

広島市のLRTの取組みについて、国の支援策を織り交ぜながら講演した。



LRTとは、「従来の路面電車に比べて低床式で乗り降りしやすく、高い速達性や定時性を有し、環境にも優しい優れた特徴を持つ新たな都市の公共システム」としている。中国運輸局では平成17年3月に「路面電車のLRT化を中心とした公共交通体系の再構築・報告書」を協議会を通じて取りまとめている。ここではLRTを交通システム視点と、まちづくりの視点から、平和大通りルートなど新規4ルートの検討を行っている。

LRTに対しては、H17年度からLRT導入支援制度を行っており、全国62都市82事業者に事業面から支援している。また「LRTプロジェクト」として、都市・地域整備局、道路局、鉄道局の連携のもと、「LRTプロジェクト推進協議会」を設置し、地域におけるLRT導入に向けた合意形成と計画を策定し、その整備計画に基づいて、補助制度の同時採択など総合的な支援を行っている。ハードに関する支援では「LRT総合整備事業」や「LRTシステム整備費補助事業」があり、後者では広島電鉄に平成17年度の超低床車両(15両:3編成)を補助し、平成18年度も同様の補助を予定している。岡山電気軌道についてもICカードシステムに補助している。中国運輸局では、速達性に優れ、バリアフリーや環境に優しい利用者本意の交通体系を推進する観点から、まちづくりと連携したLRTシステムの整備を促進するため、低床式車両の導入やその他システムの構築に不可欠な施設について関係機関と協調して支援措置を講じていく予定である。

質疑では、過年度検討した広島市内のLRT新規ルートについてその後の検討状況や、次年度に広島都市圏で導入予定のICカードについて、参加者は感心を寄せていた。

まちづくり団体と行政のそれぞれの視点から、これからのLRTについて講演をいただき、参加者とも活発に意見交換を行った。中国・四国地方はLRTの先進地域とも言え、市民団体も方々で活躍している。市民とともに育む21世紀型のLRTが、この中国・四国地方から発信していくことができればと感じたのは私だけではないだろう。

(文責：周藤浩司)

会員コラム

被爆電車の展示及びシンポジウムの開催についての報告

広島高速交通株式会社 中村良三

被爆電車654号が、広島電鉄株式会社からの寄贈を受け、広島市交通科学館前広場に、7月21日から展示された。8月31日には、その展示を記念して、シンポジウム「被爆電車への想いを語る会」が開催された。

被爆電車の展示、シンポジウムの開催は、広島高速交通株式会社が、今年の4月から、広島市交通科学館を指定管理者として運営を引き受けるようになってからの、新たな試みでもある。

シンポジウムは、秋葉広島市長、広電太田社長、主催者の広島高速株式会社社長中村の挨拶に引き続き、広島平和文化センターの斉藤理事長をコーディネーターとして進められた。交通科学館が市内から遠いということもあり、参加者は50~60名であった。

被爆した電車の補修にあたった三浦正行氏、元運転士の河野弘氏、広島家政女学校の学生で被爆時に電車の運転をしていた藤井照子氏、被爆電車に乗って被爆体験を聞く会を開いている元教師の空辰男氏、市民団体広島LRT研究会代表の山根政則氏の5名の方々にお話をいただいた。

被爆電車をテーマにしてのシンポジウムが開かれたこと。被爆電車に関係する人々が、これだけ多方面から集まり、お話をいただいたこと。広島市立交通科学館として、このようなシンポジウムを開いたこと。等はいずれも今回が初めてのことでそうである。

今回の被爆電車の展示、シンポジウムの開催については、次の3つの意味があると考えている。一つ目は、被爆電車を通して平和について考え、その記録をきちんと残していくこと。



除幕式は安西小学生、秋葉市長(左)、大田社長(右)の引き綱によって行われた。

二つ目は、広島市にある交通科学館として、新たな存在意味を確保したこと。

そして三つ目は、「被爆した翌日には、社員が出社し、路線の片付け、架線の整備、電車の修繕を始め、被爆した3日目から、電車を動かすことが出来た。お金のない人からは料金をとらなかった。」というお話があったが、こうしたことは、市民をどれほど勇気付けたか、そして広島市が復興していく上で大変大きな役割を果たしたであろうことは容易に想像できることである。このようなことを知ることは、これからの広島市の交通体系がどうあればいいのかを考えていく上で、大きな示唆となると思っている。

こうした試みを、これからも続けていくと共に、交通科学館の内容の充実にも努めていきたいと考えている。被爆電車の展示とシンポジウムの様子については、中国新聞、NHK、朝日新聞等メディアにも取り上げられたが、いずれ、纏めて冊子、HPで公開したいと考えている。



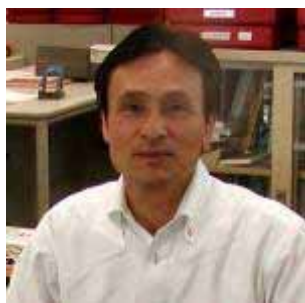
シンポジウム当日の様子(Photo:中国新聞より)

会員紹介

加藤文教(かとうふみのり)

(株)ヒロコン

新施策推進Tf本部 本部長
技術士【総合技術監理部門(建設-都市及び地方計画) 建設部門(道路/都市及び地方計画)】/工学博士



勤務先での活動

ヒロコンでは、計画系全般の業務を担当しています。交通需要マネジメント、P&Rや有料道路割引の社会実験、バリアフリー基本計画、生活バス路線計画、住民参加によるまちづくりマップ、自転車道整備計画、道路の整備効果等々、来るもの拒まずの姿勢で取り組んでいます。ある意味では、得意分野がないとも言えるのかもしれませんが。学位論文では、交通需要分析をテーマとしていましたので、自身の専門は交通計画ということで認識しています。

現在、新施策推進Tf本部に所属しています。「Tf」はタスクフォースの略で、大辞林には「企業活動などで、特別な目的のために編成されたチーム」とあります。新施策を模索し営業展開していくのが役務ということですが、皆様も苦労されているように、なかなか一朝一夕には答の見出しにくい社会環境にあります。ただし、実務担当との兼任でもあり、日々、メールと電話に追いつてられる状況は何ら変わっていません。

社会的な活動

建設コンサルタツ協会中国支部には、道路、構造、河川、防災等の技術委員会があり、私は道路部会の幹事をしています。道路部会では、有志による研究会を立上げ、協会テーマの社会貢献を基本とした活動を行っています。2006年8月下旬、日本福祉のまちづくり学会全国大会が呉市で開催されましたが、ここでは、バリアフリー対応の店舗や移動路を紹介した「らくらくランチマップ」を作成し、学会参加者に配布しました。マップの作成では、地元のNPOと連携し、福祉のまちづくりフォーラムや身障者の方との店舗・街路の点検を実施し、住民参加による活動を展開しました。

いまや住民参加は、あらゆる局面で必須条件となりつつあります。道路部会幹事として、住民との協働を念頭において活動を進めるようにしています。今年度は、広島市を対象として、「自転車によるまちづくり」をテーマに、現状を把握するアンケート調査の実施や、関係者ができるだけ本音で議論できるフォーラムの開催を予定しています。自転車を活用したまちづくりを考えていくと、走行空間、駐輪スペース、交通手段競合などにおいて様々な利害関係が発生し、合意形成を難しくしています。こうした点に配慮して、今年度の研究会活動では、提案や問題提起で終わるのではなく、少しずつでも実践できる手法や仕組みを見つけていければと考えています。調査やフォーラムでは、ぜひ皆様にも参加していただき、自転車の利用についてご意見を頂ければと思っています。

会員紹介

曲田清維(まがたきよただ)

愛媛大学教育学部・教育学部長(教授・住居学)

私の研究室の看板は上記のように「教育学部」に所属する。そうしたわけでもないが、住居学の学問体系を背景に、このところ「住教育」「住まい・まちづくり学習」などといった分野を構築すべく、学校教育から社会教育まで広い範囲での研究あるいは運動に取り組んでいる。

住まい・まちづくり学習とは

都市計画分野や住宅計画分野でも住まい学習やまち(づ)くり学習は、着実に定着してきたと思われる。「住まい・まちづくり学習」の目的を簡単に言うとなると(結構難しいのだが)、住み手が住生活の改善や住まい・まちづくりに主体的に関わっていくための基礎的能力の育成にあり、「住まいや地域を計画したり選択する力」「居住地としての住環境を守り発展させていく力」「住まいや地域を管理して長く愛用する力」「地域の気候・風土に対応して快適に暮らす力」、そして「自分たちの住むまちの将来像を構想する力」などであろうか。その対象は、子どもから広く大人まで、現在の住まいや地域の担い手から将来の担い手が対象で、そのバックグラウンドは学校教育から社会教育までのすべてと言える。

最近の取り組みから

四国松山を中心に、研究室で取り組んでいる事例を紹介しよう。松山市の隣、伊予市郡中は、江戸中期(約370年前)に開かれたまちで、奥行き長いまち割りで構成され、古い町家や、暮らしの生業を営む商店が点在する。数回のまち探検を繰り返すうちに、まち全体を博物館に見立て「郡中まちぐるみ博物館」とする構想が持ち上がった。そうすると、善は急げで、地元のまちおこしグループや、郡中小学校の児童らと何度もワークショップを開催しながら、漸く今年の春に「ぶらり遊ぼう 郡中まちぐるみ博物館」マップが出来上がった。2006年5月の連休には早速マップ片手のまち探検が催され、大いに賑わった。まちづくりとまちづくり学習は表裏一体で、「郡中まちぐるみ博物館」はエコミュージアムを模したのものとして、楽しく学習しながらまちの歴史や構成、暮らしの営みがわかるという優れたものとなっている。



<新聞博物館(地元新聞販売所)での見学風景(2005年5月)>

このほか、愛媛県内子町石畳地区の「むらなみ博物館」の研究等々、ここ数年はエコミュージアムのまちづくりとその学習に凝りつつ、愉快地やっている次第である。

ホットコーナー

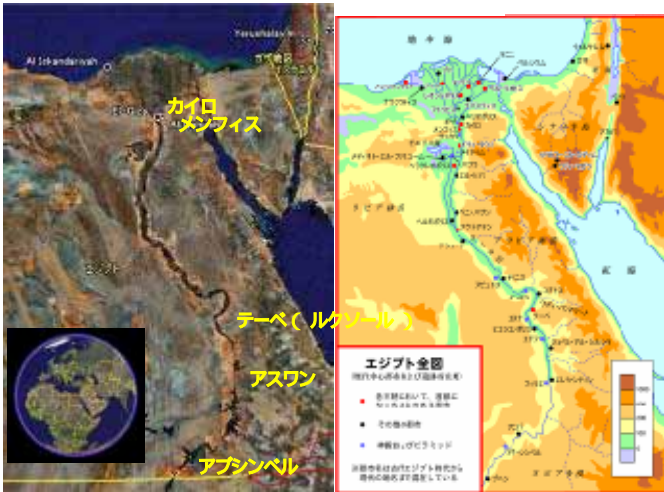
エジプトと都市

福馬晶子

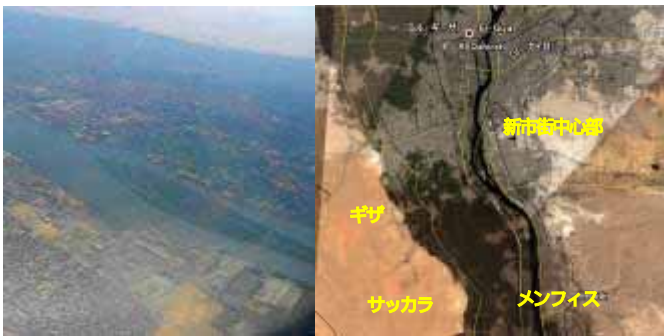
3大文明のひとつの発祥の地エジプトに行ってきたのでレポートする。

エジプト概要

エジプトは、アフリカ大陸の北東に位置する国だ。気候は、場所によって違うが、今回行ったカイロは、半乾燥気候、半砂漠気候 18 ~ 34、ルクソールは砂漠気候で 22 ~ 42 程度、ほとんど砂漠だが、川の周囲のみ、農業ができる。そのため、現在の都市も、川周辺やデルタ地域のみある。農業と観光が主な産業だ。



飛行機で接近すると砂漠の中から緑が現れるので、まさにギリシャの歴史家ヘロドトスの「エジプトはナイルの賜物」という言葉が実感できる。



カイロ上空から。川沿いの肥沃地帯と砂漠がくっきり分かれているのが分かる。

1万年前は、北アフリカ全体が緑あふれる地域だった。しかし、地軸のちょっとした移動と温暖化により砂漠化が進み、様々な人種がナイル川沿いの肥沃な土地に集まり、混血が進み、今のエジプト人の元が出来上がった。

古王国時代

紀元前 3000 年頃から統一王国ができた。その後、メンフィス(カイロ近くの都市)を首都とし、800 年程古王国時代が続いた。この頃から墓が日干し煉瓦で出来たマスタバ墳から表面を石張りにしたピラミッドに変化してくる。

石張りのピラミッドの初めてのものは、階段ピラミッドといわれるジョセル王のものだといわれる。ダムで川の水量を調節するまでは、増水期にはまさにピラミッドの際まで川が来るので、ナイル川上流のヌビアやルクソールなどの様々な地域から、様々な種類の石を運ん

できて、増水期で農業が出来ない時期にピラミッドを造っていた。石の種類を見るだけで、石灰石や砂岩、赤い花崗岩など様々な材料が利用されており、交易の様子が伺える。



ジョセル王のピラミッド。初めて日干し煉瓦だけだった墓が増築で表面が石積みになった。ピラミッドコンプレックスで、周壁、神殿や列中の回廊がある。



ギザのピラミッドは、3つ並んでいる姿で有名だ。増水期にお河岸神殿の近くまで水が来ており(船着場がある)、ピラミッドを造る石などは、参道を通じてピラミッドに運んだとのこと。



よく写真に収められるカフラー王ピラミッドとそのスフィンクス。鼻はナポレオンが削いだとも言われるが、時期的にはイスラム教信者により削がれたようにとのこと。右は、カフラー王ピラミッドと、石を運んだらう参道。



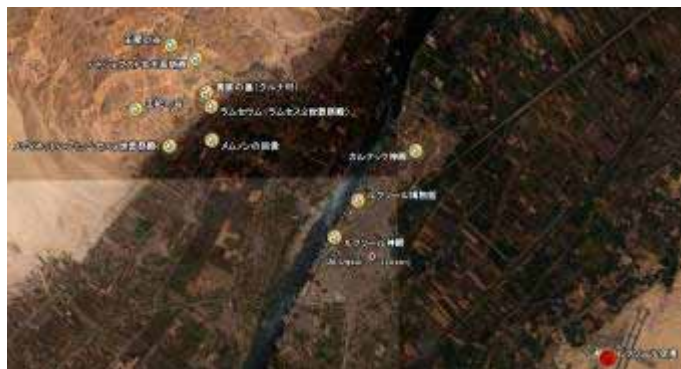
スフィンクスの見つめる先はケンタッキーフライドチキン。景観的にどうなのかという話になりそうだが、実際は、鄙ひた町で低層の建物が立ち並んでいるだけなので、それほど気になるほどは目立っていない。だいたい、スフィンクスの足元に船着場があり、今町がある部分は、増水時に水底に沈んでいたのだ。右は、日が沈むのを街から眺めたところ。あの世がある東、つまりピラミッドの近くに落ちる。しかし、現在は、ピラミッドはすぐ町の脇にあるので、生と死をいっしょくたにしたような、不思議な景観を形作っている。

中王国時代

紀元前 2200 年頃には国土は混乱し、紀元前 2040 年頃有力豪族だったテーベの豪族により再統一され中王国時代となった。文化的には、古王国時代の模倣だった。紀元前 1790 年頃、またヒクソス人の侵攻により戦国時代となる。

新王国時代

アハメス王がヒクソス人をエジプトより追放し、テーベを首都とした新王国時代が始まる。ツタンカーメンで有名な 18 王朝はこの頃だ。



紀元前 2040 年頃から紀元前 332 年までエジプトの首都だったテーベ(ルクソール) 王一族の墓がある王家の墓も近くだ。やはりまちは川より東に、墓は西に作られている。



カルナック神殿とルクソール神殿は、2 km にも及ぶスフィンクスが並ぶ参道で結ばれていた。というか、ルクソール神殿は、カルナック神殿の中心であるアモン神殿の付属神殿である。参道は、現在、発掘し、復元する工事が行なわれている。



2 km のスフィンクス参道をルクソール神殿から見たところ。途中から土に埋まり、建物が建っている。参道を全部復元するという。人頭獣身だ。



こちらはアモン神殿の前の参道のスフィンクス。羊の頭だ。アモン神を表す。



ツタンカーメンのアメンは、アモン神という意味だ。元テーベの地方神だったが、テーベが首都になると共に、太陽神ラーと結合して、国家の最高神になる。中王国時代、新王国時代と、歴代のファラオが神殿、オベリスク、神像などを寄進したため、カルナック神殿やルクソール神殿など、巨大な建物群になった。



アモン神殿。天井などは落ちてきているところがあるが、高さ 23m、15m の列柱が 134 本並び回廊は圧巻。



アモン神殿の回廊。右は、ルクソール神殿の高いところにあるイスラム教のモスク。神殿は、キリスト教、イスラム教などで、再利用された。かなりの壁画は顔などが削られる被害に合っている。このイスラムのモスクは、すっかり埋もれてしまった神殿の上部を使って作られたもの。今も使われている。裏手にあたるこちらでは、神殿に埋もれ空中に浮かぶ、不思議なモスクになっている。宗教が時代で多重に重なっているから起きる、不思議な光景だ。

二代目のトトメス 世は、南方のヌビアや、パレスチナ方面まで遠征した。トトメス 世の娘はハトシェプスト女王で、自分自身も王となり、ハトシェプスト女王葬祭殿を作るほか、ソマリアとの交易を行なった。



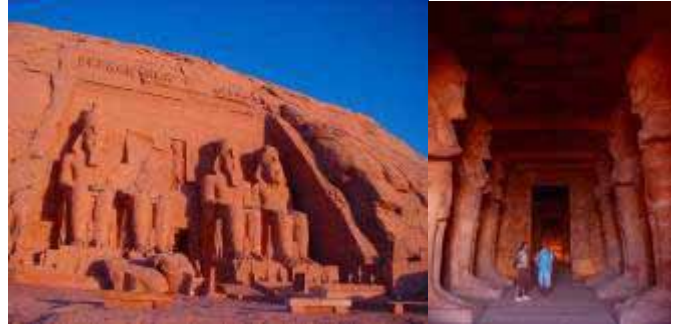
ハトシェプスト葬祭殿。建設当時は、木が生い茂り、プールがある庭園に囲まれていた。義母を憎む義理の息子トトメス 世により壊滅的に破壊される。

シンベル神殿で見ることができる。



左はプール跡。周りに木の跡もある。真ん中の写真は、ハトシェブスト女王が交易をしていたプントの植物で、壁画にも描かれているもの。右はハトシェブスト女王の像。王の姿にするために、髭も付け、ポーズも王だ。

ハトシェブスト女王の義理の息子トトメス 世の頃軍事遠征によりエジプトの国土は最大になり、その息子アメンホテプ4世は神官から政治力や経済力を取り戻すため、宗教改革をし、多神教のアメン神信仰から一神教のアトン神信仰に変え、名前もイクナトンとし、一時都市をテーベからアケトアテン(テル・エル・アマルナ)に移した。この時代の芸術は、人間回帰で特徴的な芸術であり、アマルナ芸術という。また、一神教は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に影響を及ぼす。息子は幼少期はアトン神信仰のため、ツタンカーメンと名づけられたが、神官によりアメン神信仰に戻し、首都もテーベに戻し、ツタンカーメンと名乗ることになる。その後、神官に王位を奪われ、混乱の時代になる。



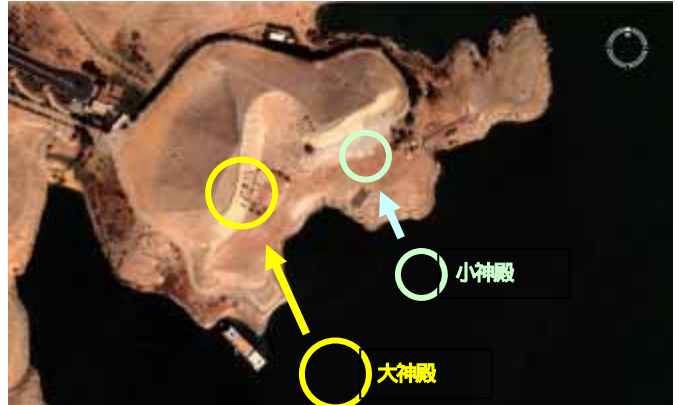
アブシンベル神殿。巨大。建設されているのは、なんでこんな辺鄙な土地にというようなヌビアの奥地の川沿いだ。征服したヌビア人に圧力をかけるためか、それとも隠し財産の管理倉庫か。しかし、勢いづいていたとはいえ、こんなに巨大な自分の像をあちこちに作らせるとは、ラムセス 世の自己顕示欲がすごい。4つの像はどれもラムセス 世のもの。少年期から老年期まで、左から右に年を取っている。



神殿内部ラムセス 世の像が列中として並び、周りには、カデシュの戦いで活躍するラムセス 世、神から神格を与えられるラムセス 世の壁画で飾られる。奥にはホルス神やラー神ブタハ神と共に、神となったラムセス 世が飾られる。



王家の墓。パッと見ただけの岩山にしか見えないところに、墓が集合している。墓泥棒から隠すために山奥に岩を掘って作ったのだが、きっちり墓泥棒の村が近くに作られている。ツタンカーメンの墓などは、墓をしっかり作るほど長生きもせず、権力もなく、元あった墓の斜め下の分かりにくい場所に小さく作られたため、墓泥棒にばれなかったようだ。小さい墓と言っても、カイロの考古学博物館の展示の1/4を占めるぐらいの宝物がひしめいていた。



アスワン・ハイダムができるにつぎダムでできるナセル湖に沈むことになったが、世界遺産として、砂岩に刻まれた神殿を、ユネスコがブロックに細かく切り刻み、コンクリートのドームの中に再現した。



メムノンの巨像。元は、アメンホテプ 世の葬祭殿とその坐像だったのだが後の王達が石材として利用したため、壊れた巨像二体のみ原っぱに立つ。プトレマイオス朝時代には、ギリシア神殿のメムノン像だとされ、ローマ時代には、地震で穴が開いて風や軋みで音がするため、像が歌うといわれて有名になった。ローマの皇帝も近くにテントを張って神像観光をしたとのこと。

軍事的なヒーローになった將軍ラムセスが王位に就き、19王朝が1320年に始まる。その後、王は神聖なものというより、むしろスポーツのヒーローとなる。息子セティ 世はアジアに遠征し、その跡を継いだラムセス 世は、シリアでヒッタイト王とカデシュの戦いが起きるが、領国の間に和平が調印され、世界で最も古い和平調印文がアブ・



ラムセス 世はあちこちに巨大像を残している。左上はメンフィスに残る巨像。右上、下はルクソール神殿にあるラムセス 世像。右下は、ツタンカーメン王夫妻の像だったものを、名前を書き換えてラムセス 世像に再利用している。

新王国時代も、紀元前 1080 年頃には末期王朝時代を向かえ、リビア人やヌビア人、アケメネス朝ペルシアなどの支配を受け、紀元前 332 年にアレクサンダー大王に征服され、マケドニア人(ギリシャ系)の部下、プトレマイオスがエジプト王になる。紀元前 304 年からプトレマイオス朝だ。この王朝は、紀元前 30 年にクレオパトラ 7 世が自殺するまで続く。ギリシア人の旅行者もこの時代から多く、神殿にたどりついた旅行者が、壁に落書きをしているものがある。



プトレマイオス朝の時代は、マケドニア人(ギリシャ人)がエジプト人を治めるため、それまでの宗教を踏襲し、神殿などを作った。これはイシス神殿。元はアスワンの聖なる島とされたフィラエ島にあったが、アスワンダムで崩壊が進み、アスワンハイダムで完全に沈没するというので、新しくできた島に移築されている。柱などに、水で削れている痛々しい跡がある。

その後、ローマ時代にはキリスト教(コプト教)文化が栄えた。オールドカイロといわれる地域には、キリスト教黎明期のキリスト教の教会などがひしめいている。この時代に、エジプトの神殿では、顔を削ったり十字架を掘り込んだり、壁を塗りこんでキリスト教の題で壁画を描いたりしてあるものもある。迫害から逃れるため、神殿で生活していた時代もあるようで、神殿の中で火を焚いた跡があり、天井が真っ黒になっているものもある。



キリスト教(コプト教)の遺跡が数多くあるオールドカイロ。

641 年にアラブ軍アムル・ブン・アル・アースがエジプトを征服し、イスラム教がもたらされる。969 年にはファティマ朝、アイユーブ朝、マムルーク朝、オスマン朝、ムハンマド・アリ朝と続き、1952 年のエジプト革命まで続く。



ガーミア・ムハンマドアリ。エジプトが頼りなムハンマドは、ルクソール宮殿のオペリスクと引き換えに、フランスから時計台を買った。そのオペリスクは、今、パリのコンコルド広場に飾られている。

エジプトを一民族国家として国際社会に再登場させたのはナセルだ。1952 年、当時中佐だったナセルは、自由将校団というグループを率いてクーデターを起こし、エジプト人による国家を打ち立てた。ナセル主義とは、「アラブ」と

いう共通の大義名分を掲げてアラブをひとつにまとめようという試みだ。スエズ運河を国有化したときには、第三世界の希望とされた。ドイツとソ連の協力により完成したアスワンハイダムでできた湖は、ナセル湖と名前が付けられ、面積は、琵琶湖の 7.5 倍といわれている。



アスワンハイダム。1970 年完成。洪水を防ぐことによりエジプトの農業の安定化と電力供給に役に立っているとのことだが、かなりのヌビアの村や遺跡が沈んだ。沈む遺跡を救うべく、ユネスコの呼びかけにより、様々な国が協力する中、日本は、鈴木八司を派遣し、調査させる。「ナイルに沈む歴史(鈴木八司)(岩波文庫)」



アスワンダム。こちらは、イギリス支配時代に 1898 年にできた。同じく農業と電力供給のために作られたが、目的を達成することが出来ず、アスワンハイダムを建設することとなる。ダムの右下に遺跡が半分見える。この頃は、遺跡にたどりついたヨーロッパの旅行者の落書きが多いなど、遺跡は軽く扱われている風である。右は、アスワンダムから見たアスワンのまち。川の東は沙漠、西はまちというセオリーはここも同じ。

その後、ナセルの跡を継いだサダトは、ナセルのアラブ的社会主義を引き継ぐといいつつも、「門戸開放(インフィターハ)」を行い、言論思想統制を廃止して民主化へ、経済的にも自由化へ移行する。1973 年の第 4 次中東戦争では、イスラエルの安息日に奇襲攻撃を行い、1977 年にイスラエル訪問、1979 年にキャンプデービッド合意に至り、西側に傾倒していき、アラブ連盟から裏切り者とされ、ナセル時代のアラブ世界のリーダーから名目を失う。外資導入や民間投資の増大により、貧富の差が拡大し、住居問題や交通問題、失業問題などの社会問題が表出してくる。

その跡を継いだムバラクは、サダト路線で着実に政策を進めている。1980 年の湾岸戦争では、アメリカ側である多国籍軍に協力。アラブの独自性を損なわせ、エジプトのアラブの盟主たる地位も下がった。パレスチナとイスラエルの和平が成り立つまで、イスラエルと和平を確立しているエジプトの立場は複雑なものとして続くだろう。

1997 年、ルクソールでイスラム原理主義者過激は集団によるテロ事件が発生し、日本人観光客も犠牲となった。現在は、どこへ行っても警察が配置され、都市と都市を車で移動する際には、「コンボイ」といった警察がついた隊列を組むなど、安全は確保されている。しかし、観光と農業が中心であるエジプトの経済的な問題、貧富格差などは、まだまだ解消できない課題だ。



現在、どの町に行っても、道路の敷設、下水道整備などが行なわれている最中で、埃っぽい。



カイロの町は、高架道路が整備され、快適だった。しかし、下道は常時混雑しており、幅の広い6車線道路でも横断歩道はないので、道路を渡るには勇気とタイミングが要る。



基本的にレンガでできた住宅が多くある。風が吹いてくる北側のアレキサンドリアの方向のみ開口部がある。雨が降らないので、外装は特にならない。工事中のものには課税がないとのことで、鉄筋が空に向かって生えている状態がよく見られる。農地の中に中層住宅が入り乱れているよといった感じだ。



農村風景。ナイル川周辺は、どこまで行っても穀倉地帯だ。実のなるナツメヤシの間に、小麦やトウモロコシや豆類がところ狭しと植えられている。建物は、日干し煉瓦でできたものが多い。時折、むしろでできた小屋がある。日よけや家畜小屋が。暑い、エジプト人は働き者のようで、午前中はどの畑にも人が出ている。子供も働くものと考えられているようで、あまり遊んでいる子供は見かけない。物売りの子供はよく見る。また、移動は口バでひいた馬車が多く、かなりの量を載せて車道を走っている姿をよく見る。女性は流石イスラム圏で、あまり見ない。ベールを被っている人をたまに見る。



やはり、ナイルは美しい。砂漠と緑と水と生命。水のおかげで生きていることが実感できる。逆に砂漠化がなければ、文明発祥の地はほかに譲っていたのだろう。

エジプトを旅して感じた事。いかに大きな文明でも、廃れる時期が来る。しかし、自然は、ナイルは、砂漠は、常にそこにあった。人間も、ひたすらそこにあった。現在のエジプト人も、ただひたむきにそこにある。毎日、毎日、黙々と、ひたすら、働き、住み、食べる。

エジプトでは、人々の生活の遺跡は、砂漠にあったピラミッド工場の村ぐらいいままだ発掘されていないようだ。毎年日干し煉瓦でできた街はナイルに沈んでいたと言われる。現在のエジプト人の生活の有様を見ると、この人達が当時もひたすら生きてたのだ、自然と同じく、ただひたすらそこにあったのだと考えると、なるほど、ピラミッドもいつか造ってしまうはずだ思わせられる。日本人が最近忘れかけてきたひたむきさだ。そんなことを旅で考えた。

(参考文献・資料:google earth, Nasa 衛星写真, 地球の歩き方, 南風博物館 HP)



平成18年度第2回幹事会報告

日時：平成18年7月29日(土) 13:00~14:50

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ研修室C

議案1 委員会の構成について

1) 企画・研究委員会

- ・ 委員長：高井広行
- ・ 副委員長：山下和也
- ・ 委員：留任18名、新規8名、退任5名、計26名

2) 学術委員会

- ・ 委員長：塚本俊明
- ・ 副委員長：藤原章正
- ・ 委員：留任5名、新任3名、退任1名、計8名

3) 総務委員会

- ・ 委員長：佐藤俊雄
- ・ 副委員長：佐伯達郎
- ・ 委員：留任6名、新規2名、退任1名、計8名

議案2 平成18年度事業計画の具体化について

(1) 総会で決定した事業

1) 企画・研究委員会

- ・ 都市計画研究会：4回開催。内3回をメインテーマである「LRTとまちづくり」1回を次年度テーマで開催。
- ・ 講演会・シンポジウム等：特別講演会1回、都市計画サロン2回程度、見学会1回、シンポジウム1回、他。
- ・ 電子会議室試験運用：日常的な運用は難しい状況であり、暫時休止とする。
- ・ 地域活動助成：「高松市における市街地整備事業の見学会と懇談会」(担当：近藤光男副支部長)

2) 学術委員会

- ・ 調整中
- 3) 総務委員会
- ・ ニュースレター：年4回発行。編集委員長は周藤浩司委員、総務委員全員が編集委員。
- ・ CPD事業：本部の認定会議は2ヶ月ごとに開催。支部の運用は、参加者名簿から認定希望者の会員番号を事務局が入力。

(2) 社会的活動(支部連携事業)

テーマ

中国・四国リレーシンポジウム“公共空間とまちづくり”&“市民まちづくり懇談コーナー”の開設

実行委員長：杉恵頼寧支部長

開催予定地及び責任者

- ・ 広島市(松波龍一副支部長)
- ・ 松江市(熊谷昌彦幹事、森山昌幸幹事)
- ・ 岡山市(阿部宏史幹事)
- ・ 徳島市(近藤光男副支部長)
- ・ 高知市(大谷英人幹事)
- ・ 市民まちづくり懇談(相談)コーナー(松田智仁企画・研究員) 各会場で開催予定
- ・ スケジュール

18,19年度の2ヵ年とし、松江市を18年度、他の4都市19年度開催予定とする。

(文責：佐伯達郎)

今後の活動計画

(1) 第3回都市計画研究会(LRTと街づくり)/支部主催事業

日時：平成18年10月7日(土) 15:10~

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ マルチメディアスタジオ・調整室

講演者と講演題目：

1) 田口依久夫(広島電鉄株式会社 総合企画グループ交通企画チーム 公共交通担当リーダー)

「日仏協力会議への参加とフランス諸都市の都市交通視察」

2) 佐藤俊雄(中国地方総合研究センター 地域計画研究部長)

「中枢都市の都心活性化とLRT化」

(2) 農村計画シンポジウム/支部共催事業

趣旨：近年多くの災害にみあう農山漁村地域における災害復興を考えると共に、農村計画分野における故地井昭夫先生のご業績を検証する。

主催：日本建築学会中国支部

日時：平成18年12月2日(土) 13:30~17:00

場所：広島工業大学広島校舎 201室

会費：無料(第1部・第2部)

第1部：農山漁村地域での災害復興を考える

基調講演：

- ・ 重村力(神戸大学)「中越提言の考え方ならびにジャワ島中部地震災害の現状」
- ・ 内田文雄(山口大学)「まちの中心部の再生計画と、中越地震・十日町市・川西地区のまちづくりを事例として・・・」
- ・ 岡田知子(西日本工業大学)「震災復興のあり方 - 玄界島の事例から - 」
- ・ 石丸紀興(広島国際大学)「地震による集落景観の変容から新たな対応を考える」
- ・ 質疑応答

第2部：農村計画における地井昭夫先生の業績を振り返って

パネルディスカッション・シンポジウム形式

コーディネーター 石丸 紀興(広島国際大学)

パネリスト 重村 力(神戸大学)

森保 洋之(広島工業大学)

篠部 裕(呉高専)

山下 和也(地域計画工房)

林 康文(広島県庁)

宮本 茂(中国地方総合研究センター)

総合司会 熊野 稔(徳山高専・中国支部農村計画委員会委員長)

主催：日本建築学会中国支部(実行幹事：中国支部農村計画委員会)

共催：日本都市計画学会中国四国支部
連絡先：徳山高専・熊野稔研究室 0834-29-6333
kumano@tokuyama.ac.jp

第3部 地井昭夫先生を偲ぶ会

主催：中国支部農村計画委員会
会場：広島工業大学広島校舎・1階 時間：17:30～
会費：4,000円(当日徴収)

(3)支部連携行事について

学会本部から各支部に、「支部活動の活性化、社会連携の推進」を主目的に助成(最大100万円、2か年程度)があります。

本支部では、下記のような企画を本部に提出し、理事会で承認されました。

今後、杉恵支部長を委員長に実行委員会を立ち上げ、皆さまのご協力を得ながら、具体的に取り組んでいきますので、よろしくをお願いします。

テーマ：中国・四国リレーシンポジウム“公共空間とまちづくり” & “市民街づくり懇談(相談)コーナー”の開設

4都市において、“公共空間とまちづくり”を共通の切り口としてシンポジウムを開催するとともに、4都市でのシンポジウムを総括する形で、全体的なシンポジウムを開催し、特色や課題、提言などをまとめ、発信します。

シンポジウムでは、「市民参加のあり方」「維持管理、占有的な活用をどうするか」「空間・環境効果(防災、景観、美しさ、利用しやすさ...)」は何か、どんな方法があるか」などを掘り下げるとともに、「どんな活用・利用ができるか(アイデア・メニュー)」も引き出したいと考えています。

シンポジウム開催日(広島市等)に市民街づくり懇談(相談)コーナーを開設します。

< 4都市：候補地とテーマ案：2006年度、2007年度 >
松江市：水辺環境の景観・活用と治水について...2006年度(2007.3.10、会場：国引きメッセ)開催予定(責任者：熊谷昌彦氏)

岡山市(または倉敷市)：公共空間と歴史遺産を生かしたまちづくり(責任者：阿部宏史氏)

徳島市：水辺の空間活用とまちの魅力・元気づくり(責任者：近藤光男氏)

高知市：街路市の地域力とまちづくり(責任者：大谷英人氏)

< 総括：開催地とテーマ案：2007年度 >
開催地：広島市

テーマ：中国・四国の現場に学ぶ、公共空間とまち(街)づくり(責任者：松波龍一氏)

< “街づくり懇談(相談)コーナー”の開設 >
概ね5年以上活動している市民団体との街づくり懇談または相談の場の開設(責任者：松田智仁氏)

編集後記

つい先日まで「暑い。暑い。」と言っていたかと思うと、もう朝晩の風が肌寒く感じる季節となりました。今年の夏は神出鬼没の「ゲリラ雨」が各地に被害をもたらしましたが、台風シーズンとなると今度はあのカトリナ級などの報道に翻弄されています。我が国の気候が熱帯化している証かも知れません。地球にやさしいまちづくり、秋の夜長に少し考えてみてはいかがでしょうか。

ところで、このニュースレターは、支部学会員の情報交換の場として発刊し、号を重ねて第12号となりました。今後は、皆様からのご意見・ご要望をお寄せいただき、このニュースレターをさらに充実していきたいと思っております。

そこで今回、会員の皆様から「まちづくり寄稿文」を募集することになりました。会員間の交流のツールとして、このニュースレターを活用していただくとともに、さらにパワーアップしていきたいと思っております。募集要綱をご覧ください。是非、お気軽にご投稿ください。

(周藤浩司)

まちづくり寄稿文・募集要綱

- テーマ
まちづくりに関するトピックス、提言など
- 応募資格
日本都市計画学会員(学生会員の方、歓迎です)
- 応募方法・提出方法
 - ・ 枚数はタイトル、本文等を含めてニュースレター1ページ分(2,500文字程度、写真等を含む)です。
 - ・ ワードプロソフト(ワード又は一太郎)で原稿を作成し、データを提出先までメール送付してください。
 - ・ 郵送の場合、CD、MO等に保存の上、媒体を郵送してください。
 - ・ 送付の際には、住所、所属、氏名(ふりがな)、年齢、連絡先電話番号を明記してください。
- 提出先・お問い合わせ
日本都市計画学会 中国四国支部事務局
〒730-0041 広島市中区小町4-33
(社)中国地方総合研究センター 佐藤
TEL 082-245-7900 FAX 082-245-7629
E-mail: sato@ccrc.or.jp
- 〆 切：平成18年12月11日(月)必着
応募原稿は、原則として返却いたしません。
応募いただいた寄稿文は、第13号(H19.1発行)で掲載しますが、応募者多数の場合など掲載できない場合がありますので、予めご了承ください。
氏名、所属は、公表されることを前提としてください。
今回の目的以外で個人情報を使用することはありません。

編集委員：周藤浩司(編集長)、佐伯達郎、佐藤俊雄、隅田誠、高田禮榮、長谷山弘志、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也